

[講演要旨] 昭和南海地震における宮崎県の被害状況

安藤正純(宮崎県立図書館)

§ 1. はじめに

南海トラフを震源とする南海地震で、宮崎県関係で資料数が豊富なのは安政南海地震(1854年)が群を抜いており、宝永地震(1707年)がそれに続く。

しかし、昭和南海地震(1946年)は、宮崎県に被害をもたらした最新の南海地震でありながら、その研究は全くと言ってよいほどなされていない。

理由としては、当時の新聞報道をみても被害が軽微であり、戦後の混乱期にあったとは言え、復旧が迅速に済んだことから、県民の記憶に深く刻み込まれることが無かったという点が挙げられる。

ただし、その被害状況をまとめておくことは、安政南海地震(1854年)や宝永地震(1707年)との比較をする上で重要であるので、ここに簡潔にまとめておく。

§ 2. 『日向日日新聞』にみる被災状況

現在の宮崎県の日刊紙は『宮崎日日新聞』一紙であり、当時は『日向日日新聞』と呼ばれていた。当時の紙面は戦後の物不足の状況もあることから、一日2頁しかないが、それでも昭和南海地震の取り上げ方は、下記のような記述のみで、決して大きくはない。



(図1)「宮崎県の昭和南海地震の被害状況」
(『日向日日新聞』昭和21年12月22日紙面より)
※宮崎日日新聞社提供

津波被害に関しては、県北延岡の土々呂港に津波が襲来、床下浸水2百戸、床上浸水数戸とあり、同港の長さ5間(約9m)の妙見橋が流失した。

ちなみに、県央宮崎郡青島村折生迫では一丈余(約3m)の津波で漁船数隻を押し流し、県南の南那珂郡でも一丈余の津波により漁船が多く流され、床下浸水の家屋もあったが被害は軽微としている。

その他、県内では屋根瓦がずり落ちる、停電、電話線や送電線の混線、がけ崩れ等があげられているが、翌日には復旧したとしている場所もある。

なお、東臼杵郡北方村(現:延岡市)の槇峰鉦山では、地震後、坑内でおびたしい浸水があったという。(『日向日日新聞』昭和21年12月27日・31日紙面)

§ 3. 昭和南海地震の際の宮崎県の震度

さて、それでは昭和21年12月21日の地震の際の宮崎県内の震度はどれくらいであったのだろうか。先述の『日向日日新聞』の記事では、宮崎測候所の測定で「宮崎市に於ける最大振幅50ミリ、震度階級は4が最高」とだけあり、県内各地の状況は不明である。

県内には、上記新聞記事以外に、この地震の震度を示す資料は無いのであるが、この度、東京大学地震研究所が、当時、アンケート調査を被災地に対して実施していることを知った。宮崎県内でも県北・県南・県央・県西とほぼ万遍なくデータ採取ができておりかなり貴重な資料と言ってもよい。よって、その結果(表1)を示させていただくことにした。

郡	町村	経度	緯度	改訂メルカリ震度	気象庁震度
宮崎郡	田野村	131.303444	31.838389	4.9	3
南那珂郡	東郷村	131.392194	31.624833	4.2	2
	都井村	131.305583	31.396778	5.6	3
北諸県郡	三股町	131.124972	31.730694	5.5	3
西諸県郡	真幸村	130.76467	32.046198	5.9	4
児湯郡	都農町	131.559722	32.256472	5.9	4
東臼杵郡	北川村	131.694806	32.698989	4.6	2
	南郷村	131.334833	32.386056	6.0	4

(表1)「昭和南海地震における宮崎県内各地の震度」
東京大学地震研究所「古地震・古津波記録委員会」提供

§ 4. まとめ

『日向日日新聞』(昭和21年12月22日記事)と東京大学地震研究所が採取したアンケート結果(表1)を符合すると、昭和南海地震における宮崎県内の被害状況は決して大きくは無かったと推察される。

しかし、宝永地震(1707年)や安政南海地震(1854年)では、多くの古記録がその被害の甚大さを物語っており、そのことからすれば、今後とも宮崎県内では、南海地震に対する防災意識の向上が求められるであろう。